

青龍祭の夜

【中編】

作:近藤せいけん



突然、カメラのレンズを向けた。一瞬、二人を眺めて、そして微笑みを浮かべながら、近寄ってきた。

「お二人の写真を撮らせてくれませんか」

妹の絹江が驚いて、「え、私達の写真ですか?」、絹子は黙っていた。

「初めまして、久坂 源次といいます。写真を撮るのを、仕事としています」

「突然で、驚きでしょうか。ぜひ、お二人の写真を撮りたい。お願いいたします」「私はこのお店を雑誌に載せるために、撮影しています。そこに、偶然、あなた方をカメラレンズで見ました」

「私が探していた、イメージにピッタリでした。大変、驚きました。天のお引き合わせです。お願いいたします。」

この時、店の入口から、背の高い、青い目をした、外国人が出てきた。

写真家の久坂と話をしていた、外国人が二人に頭を下げ、挨拶をした。

「私はこのフランスの店の、支配人しています、ピエールと申します」

「久坂さんの願いを、どうか聞いてもらえませんか。私からも頼みます」

流暢な日本語で二人に話しかけた。

絹子は黙っていた。

絹江が絹子の表情を伺うように、顔を見つめた。その時である、絹子の携帯が鳴った。

その場を離れ、電話に出た。

「ハイ、熊坂です。」 「絹子さん、清太郎です。おはよう。今、どこですか？」

「おはようございます。もう、清太郎さんのお店の近くです。ちょっと、困った事が起きて・・・」 「え、困った事、て・・・」

絹子は清太郎にカメラマンの事を説明した。「どこの店の前、それで、相手は何という方ですか？」 「お名前は、確か、久坂 源次さん。お店はフランスのショップよ」 「ええ～本当! すぐ行くから、そこにいて」

というなり、電話は切られた。絹子は何のことが解らなかった。

絹子が戻ると、絹江は久坂と楽しそうに話しをしていた。

「お姉さん、誰と話していたの?」 「清太郎さんと、今すぐ、ここに来るって・・・」 「え、え本当。それは、いいわ」

ほどなく、清太郎が小走りで、駆けよってきた。

「清太郎さん、ずいぶん早かったのね」 「あ、あ、駆けてきたから」

「オオ～、南社長さん!」 「久坂先生。お久しぶりです」

「ピーエル支配人、いつもお世話になっています」

「驚いたなあ～このお二人のお知り合いなんですか！」

「ええ、私のところに来る、途中だったのです」

「え、え～二度、ビックリ。それでは、南社長からも、お願いして下さい」

久坂が南に「写真を撮らせてほしいと」いう、願いを説明した。

南は何度も、うなずいていた。しばらくして、清太郎が二人を、木陰に呼んで、話した。

「絹子さん、絹江さん、久坂先生は写真家としては、一流だ、撮ってもらおうしても、なかなか撮って貰えないカメラマンだ」

「めったにないチャンスだ、絹子さん、デザインで入選して、これから、世に出ていく為に、この人に撮ってもらえば、大きな後ろ盾になる」

「撮ってもらいなさい」「絹江さんも、将来の何かの役に立つと思う」

ふ～っ、と絹子は息を吐いて。

「このお店のピーエルさんも、この世界では、有名な人だ。知り合いになることは仕事の役に立つ」

絹子は目線をあげて、遠くの空を見つめた。ふと、青龍が空に昇ってゆくのが絹子には見えた。決断をした。

「久坂先生。こんな、私たちで、よければ、撮して下さい、お願いいたします。」

「は、あ、有難うございます。いい写真を必ず撮ります」

ピーエル支配人も微笑んで、「有難うございます」と頭を下げた。

「先生。メイクを直しましょうか？」

「いいえ、いまのままの、自然の姿がいいです」

清太郎が見守るなか、写真の撮影が始まった。

数時間の時が過ぎた。

「さあ、終わりました。有難うございました。」

「とても、いい、写真が撮れました」「あなた方の、新鮮で、清楚な感じがあらわれた、いい写真が撮れたと思います」「私にとって、最近にない、自信作です」「楽しみにして下さい」

「出来上がったら、お送りいたします」

ピーエル支配人が「どうぞ、中で、お茶を召し上がって下さい。さあ、どうぞ」二人は清太郎に促されて、店内に入った。そこは、別世界の雰囲気があった。支配人室に通おされた。室内はロココ様式にまとめられ、落ち着いた、空間となっていた。

絹子と絹江は珍しそうに、辺りを見回した。

「サア、どうぞ、お座りください。」

久坂と三人は大きな大理石のテーブルに座った。

「本当に有難うございました。私が探していた、撮りたいと思っていた、人にやっと会えました。その上、南社長のお知り合いとは、とてもうれしいです」

「南社長からお話を聞きました。東京コレクションに入選された、デザイナーとの事、偶然でなく、ここで、あなた方に会えるよう、天が機会を作ってくらたと、感謝しています」

清太郎が「はい、そうですね。天でなくって、龍が会わしたんだと思います」

「え、龍て、何ですか？」「いいえ、冗談です、ははは」

「この写真は、雑誌、ワールド・ファッションの日本語版・フランス語版・イギリス版の表紙を飾ります」

「え～え、本当ですか。お姉ちゃん。どうしょう！」



ピエール支配人、写真家久坂に見送られて、三人はピエールの店を出た。南の会社を目指した。妹の絹江は大学に行くため途中で別れた。

「南さん、またお会いいたしましょう」 「今日はありがとうございました」

「姉を宜しく願います」と頭を下げた。

「また、遊びに来て下さい。待っていますよ」

「ハイ、ありがとうございます」

「絹ちゃん、またね」という、姉の声に見送られて、ケヤキの道を駅に向かって歩き始めた。

清太郎と絹子はほどなく、清太郎の会社に着いた。

清太郎の会社は白い外装を施した、モダンな4階建てのビルで、1階、2階が店舗。3階がデザインルーム、4階が事務所兼応接室となっていた。

1階の店舗にはすでに、多くのお客さんで賑わっていた。

「清太郎さんのお店は、とてもキレイね、まるでホワイトハウスみたい」

「そう、お客さまも、表参道のホワイトハウスとよぶ人もいますよ。ワハハハ」

「本当、清楚で美しいレイアウト、デザインだと、私もそう思います」

「この町の雰囲気ピッタリですこと」

店内から、店長の黒沢礼子が出てきた。

「熊坂先生、いらっしゃいませ。今回はご受賞、おめでとうございます」

「先生もこれから、大変、忙しくなりますね」

「ありがとうございます。これからも宜しくご指導をお願いいたします」

と絹子は軽く頭を下げた。

店長の黒沢礼子は、元、ファッションモデル出身でスラリとした、長身でテキパキと仕事をこなす、有能な社員であった。

店脇のエレベーターホールよりエレベーターに乗り、4階の応接室に向かった。降りると、床は白い大理石が敷き詰められており、壁の色調も淡いピンク色の清楚な落ち着いた空間となっていた。

応接室に通された。

「絹子さん、どうぞお掛け下さい。」「今日は色々な事がありましたね。アハハハ・・・」

「本当。今日はいろいろありました。写真家の久坂さんとの出会い。どんな写真になるのでしょうか・・・」

「少し、心配しています・・・」

「大丈夫。大きな飛躍のチャンス、これから、絹子さんが、絹子ブランドが発展し、売り出してゆくチャンス」

「うちも絹子ブランドを、大々的に売り出すチャンスにしたいと思う」

「さて、商売の話をししましょう」

テーブルの上にある、受話器を持ち上げ、内線をプッシュした。

「店長の黒沢君とデザイン部の吉見君を呼んでください」

まもなくすると、ドアをノックすると、二人が入って来た。

「絹子さん、紹介するよ。店長の黒沢君はもう知っているね。こちらがデザイン部の吉見君」

「熊坂先生。デザイン部の吉見です。宜しく願いいたします。」

「はい、こちらこそ、宜しく願いいたします」

「さあ、挨拶はそのへんで、座ったり、座ったり」

「どうだね、絹子ブランドの人気は。売れ行きは。」

「はい、とても、売れ行きはよく、増産する必要があります」

「先生のデザインは斬新で、人気が高く、しかも今回の受賞で益々、絹子ブランドが上昇してゆくと思います」

「ほう～いい話だ」

「店のコーナーも大きく広げたいと思っています」

絹子は急激なこのところの変化を、ただ、驚いて、ついてゆくの、やっとの状態であった。南と社員の会話、そして明るい笑い声がいつまでも続いた。

「さあ、打ち合わせはこの辺にして、絹子さんを駅まで送ってゆく」

「はい、今日は皆様、ありがとうございました。今後も宜しく願いいたします」

清太郎に送られ、絹子は表参道の駅まで、話しながら歩いた。

「また、私の会社を訪ねて下さい」

「はい、ありがとうございます。また来ます」

「清太郎さんも、清川を訪ねて下さい」

「そうだね、また、あの美味しい、空気を吸いに行きたいね」

「そうそう、絹子さんが、前に言っていた、宮ヶ瀬湖畔のクリスマスツリー、ぜひ見てみたいな」

「ええ、とても、幻想的で、美しいクリスマスツリーです。ぜひ見に来て下さい」

「お待ちしております」

「ありがとう。ぜひ、行きたいな」

表参道の階段で二人は別れた。

絹子は代々木上原で小田急線に乗り換えて、新宿に向かった。

ロマンスカーに乗るためである。

本厚木停車のロマンスカーに乗った。座間駅を通りすぎるあたりから、悠然と聳える「霊峰大山」が見えてくる。

絹子はロマンスカーの室内の窓ガラスごしに、両手を合わす。

「大山様、無事帰ってきました。いつまでも、御見守り下さい」

列車は「大河相模川」の鉄橋をガタコン、ガタコン音をあげながら渡った。

「本厚木駅」が見えてきた。



いつしか、秋も深まり、丹沢の山々も紅葉が一段と見事さを増してきた。清川村の絹子の工房での仕事も、東京コレクション入選以来、忙しくなり、仕事に追われる日々を過ごしていた。仕事の量が増えたため、絹子の工房も、若い社員、沼田、斉藤、湯川が新たに加わり、急激に増えた注文に応じ、活気に満ちた工房になっていた。

電話のベルが鳴った。沼田あやねが受話器をとった。

「はい、絹子工房でございます。南社長でいらっしゃいますか、いつも、お世話になっております」

「少々、お持ち下さい」

「先生、お電話です」 「はい～どちらから」

「東京の南社長からです」

絹子は受話器をあげた。

「はい、絹子です」 「清太郎です。久しぶり、お元気」
「はい、お陰様で。いろいろとご配慮いただきまして、ありがとうございます」
「どう、忙しいでしょう。注文は順調に入っていますか」
「はい、ありがとうございます。毎日、目の回るようです」
「アハアハア～それは良かった。どんどん、作って下さい。どんどん、絹子ブランドを売りますよ」
「これから、もっと忙しくなりますよ」
「ところで、本題にはいりますが」
「今日、久坂先生が私の会社においでになりました」
「ワールド・ファッションの日本語版が完成したので、お持ちしたとのこと」
「直ぐ、見せていただきました」
「表紙の写真は本当に、よく撮れていますよ」
「素晴らしい、出来栄えです。さすが、久坂先生の作品だと思いました」
「店長の黒沢君も良く出来ていると、感心していましたよ」
「絹子さん、この本が世界中を駆けめぐるとは、すごい事」
「え、そうですか。どんな写真になっているか、本当に心配」
「早く見たいわ」
「久坂先生からの伝言で、近いうちにお会いして、直接、本をお届けしたいと言っていました」
「それに、清川の工房を訪ねたいと」
「あなたの仕事ぶりを、雑誌で紹介したいとも話していました」
「え～え どうしましょう」
「大きなチャンスだよ。清川の自然と、あなたの仕事、雑誌を通じて、世界に紹介したいと話していたよ」
「本当ですか・・・」
「さあ、いつ頃がいいか、決めて」
「はい、あまりに、ビックリしたので、考えがつきませんが・・・」
「おいでになるのならば、12月の上旬が宜しいと思います」 「宮ヶ瀬湖畔のクリスマスツリーをご覧くださいませ」
「そう、そうだね。それがいい」
「日時が決まったら、また連絡します」

清太郎の電話は少なからず、絹子の動揺を与えた。

あまりにも、急展開で絹子が考える時間もなく、ただ、清太郎の声が耳に残った。

絹子は工房の裏庭に出て、小鮎川沿いを歩き、動揺をしずめようと何回も深呼吸をした。清川の澄んだ空気が胸いっぱい広がった。いつものように「霊峰大山」に向かって、手を合わせ、目を閉じた。

「大山さま、絹子の行く末もお守り下さい」と祈った。

「青龍」が天、高く飛ぶ姿が、心に浮かんだ。



12月に入って、清川も、本格的な冬の訪れをむかえ、寒さも一段と増してきた。清太郎から二日後に、写真家久坂と一緒に、絹子の工房を訪ねると電話が入った。

絹子は妹の絹江に電話をし、清太郎と久坂が清川の工房に来ることを告げた。

「お姉さん、すごい話じゃない、ぜひ雑誌に取り上げたもらって」

「大きな、チャンスよ」「必ず、ゆくから」「楽しみ、楽しみ」

絹江は興奮気味に話して、電話は終わった。

当日、絹子と絹江は絹江の運転だ小田急線本厚木の駅に、迎えにいった。改札口で待った。新宿からのロマンスカーが駅に着いた。

しばらくすると、清太郎と久坂が歩いてきた。

「やあ、久しぶり、絹江さんも一緒。ありがとう」

久坂はニコニコ笑いながら、「この間は、ありがとうございました」

「雑誌をお持ちしました。お気に召す、といいのですが」

絹江は「わあ～早く、見せて、見せて」「まあ～よく撮れていること」

「本物より、美人に撮れているわ」

「ほ、ほ、ほ、やだ、絹ちゃん、本当、何てきれいに撮れていること」「お姉さんも、そう、思うでしょ。」

「私は、ピエールさんのお店の、写真全体のことを言っているのよ」

「でも、お姉さんも、一段ときれいに撮れているわ。そうでしょう、清太郎さん」

「あ、あ、そのとおり、美しく撮れている。最高、最高、ハア、ハ、ハ」

皆んなで、笑いながら、駅の北口に出た。

久坂が「厚木に初めて、降りたが、この辺はビルが多く、都会的ですね」「こんなに、開けているとは、想像もつかった」

駅からすぐ近くの、駐車場に歩き、絹江の運転する車に乗った。

国道から清川線に入り、まもなく、両側に田園風景が広がってきた。

飯山を過ぎるあたりから、「霊峰大山」がくっきりと見えてきた。

「うわあ、ここから見る、大山はとても、美しく、しかも雄大、昔から、人々の信仰の山、憧れの山として、崇められている理由が、解かるような気がする」

「本当だね。大山を見ていると、でんと構えており、心が落ち着く山だと思う」

車はやがて、小鮎川沿いを上り、清川村に入った。

清川村の役場を通りこして、まもなく右折した。川音が近づいてきた。古民家の前で車は停車した。

車を降りた。久坂はじっとして、耳をかたむけていた。

「水音が気持ちいい、まるで心に澄み通るようだ」

「空気も東京とは違う、新鮮でおいしい。これこそ自然そのものだ」

「本当だね、心が洗われるようだ。いい所だねえ、ここは」

絹子が声をかけた。

「さあ、どうぞ、お入り下さい」

清太郎と久坂は工房に入った。

三人の社員が出迎えた。

「いらしゃいませ」と声をかけた。

二人は微笑みながら、挨拶を交わした。

絹子は久坂からもらった、雑誌を三人に手渡した。

「よく、撮れている。キレイ、最高、最高」

とてんでに言いながら、ガヤガヤと談笑した。

「それにしても、この古民家は堂々として大きいこと。この黒光りしている柱、梁の太いこと、立派なこと、驚いた」

「天井も高く、工房にするには向いているね。だいぶ、年代物でしょ？」

「はい、母の話では、明治時代の建築だそうです」

「へ～そうだろうね、東京ではまず見かけない、古民家だと思う」

「さあ、久坂先生。今、作っている、デザインをお見せいたします」

絹子がモチーフとしている、清川の自然、四季の移り変わりの美、生き物たちの有様、山、川、湖のいろんな作品を見せた。

久坂はカメラで撮影を始めた。絹子と絹江は作品の前でポーズを撮ったりして、久坂に協力した。

久坂は忙しく歩きまわり、工房と外に出て、古民家の全体像、近くを流れる、小鮎川、谷太郎川、山々等をカメラに収めたりした。

優れた文筆家でもある久坂は、メモを取り出して、絹子に色々と質問し、雑誌に載せる記事を書いていた。

数時間が過ぎた。山間の里、清川の冬の夕暮れは早い、すでに暮れなずむ、夕陽がだんだん落ちようとしていた。

「さあ～終わった。宮ヶ瀬湖にいきましょう。夕陽の落ちる前に湖を撮影したい。」

「ちょうどいいです。湖の撮影が終わったら、クリスマスツリーを見る前に、おいしい日本そばを食べましょう」

「それは楽しみ。僕は日本そばが大好きなんだ、ハア、ハ、ハ」

社員に見送られた、絹子工房を出た。

四人は絹江の運転で、宮ヶ瀬湖に向かった。

急の坂道を何回も登ると、山間に大きな湖が見えて来た。湖の水面が夕陽に映え、キラキラ輝き、深い青色の水と何ともいえない、コントラストをたたえていた。

車を降り、久坂は写真撮影に没頭した。絹江は久坂の写真撮影に興味があり、カメラケースを持ってあげ、つききりで後をついて行った。

絹子と清太郎は二人で湖畔にたたずみ、話をしながら、沈みゆく夕陽を、寒さを忘れて眺めていた。

辺りが暗くなってきた。久坂の撮影が終わった。

「さあ、行きましょう。おいしいそばを食べに」

「いいね、楽しみ」

湖畔のすぐ近くの駐車場はすでにクリスマスツリーを見る若者で満車状態になっていた。

少し離れた場所の駐車場に車を置き、日本そば屋まで歩いて行った。

名物皿そば、手打ちそば、山登と、染め抜かれた、のれんがはためいていた。くぐると、自然を生かした和風の庭があり、その先に入口があった。

店内は落ち着いた、木目調になっており、厚い年代物の木肌が鈍い光りを放っているテーブルに、案内をされて四人は座った。

「皿そばを四人前下さい」「ここの皿そばは、名物なんですよ」

微笑みながら、絹子は話した。しばらくすると、皿そばが運ばれてきた。

細麺の手打ち蕎麦が、五枚の皿に盛られ、そばつゆ、薬味としてわさび、おろしダイコン、細切りの葱が竹を輪切りにした筒に盛られ、小さい椀に、摩り下ろした山芋、うずらの卵がおぼん

に乗って出てきた。

「さあ、食べましょう、とても美味しそう」

「いただきます」 久坂と清太郎はそばつゆにわさびを、少し溶かし、ねぎ、ダイコおろしをいれ、そばをからませ、スルスルと口に運んだ。そして次は摩り下ろした山芋、うずらの卵を入れ、そばをからませ食べた。

「うまい、これぞ日本蕎麦だ」 「こんな山奥でこんなにうまい蕎麦に出会えるとは、ラツキー」

久坂も清太郎も

「うまい、おかわりしたい」「もう二皿下さい」

四人の会話ははずんだ。

食事を終え、四人は冷えこんだ外に出た。

たくさんの人が来ていた。

大きなモミの木に美しいイルミネーションが輝き、てっぺんに星がかざられた、ジャンボクリスマスツリーが見えた。

沢山のカメラのフラッシュがたかかっていた。

「このツリーは高さ30mもあるんですよ」

「すごい、幻想的、山間の、しかも湖畔のクリスマスツリー
素晴らしい、孤高のツリーだ」

「本当だ、来てよかった・・・」

絹子と清太郎、久坂と絹江それぞれ並びながら、いつまでも眺めていた。



清川村の絹子の工房も、静かな穏やかな、新年をむかえ、のんびりとした、正月を過ごしていた。

絹子は久しぶりの休日をリフレッシュし、新しい年が良い年でありますように、「霊峰大山様」にお願いしたりし、家の近くの小鮎川沿いを散策したりして、過ごしていた。

静かな山間の正月。

今日も午後から散歩に出て、最近の大きな変化を思い出し、身の引き締まる思いであった。

大きな、急激の変化、清太郎とのこと、写真家久坂との出会い、雑誌の掲載、新たらしいデザイン、いろんなことが頭に浮かんだ。

これから、どんなことが待ち受けているのだろうか。

不安と期待が入り混じった、複雑な心境であったが、大きな希望、夢も一杯、心に広がっていた。

「私はこの清川村に生まれ、育ち、仕事を得て、しかも、この地の山、川、森、湖、生き物、この清川の大自然をテーマに作品を作れる。この地に生きている幸せ、とても恵まれている」としみじみと思った。

絹子は歩きながら、せいけんの詩を、口ずさんだ。

『清らかな流れ 山間を下り

早き水 あくまで澄み

ありがたき ふるさとの川

なつかしき 山 聳え

ここは水の 生まれいずるところ

水の郷 清川

心 優しき村人 絆 深し』

山間に、青空が広がり、新春の光に満ちていた。